

112. アナフィラキシーに関する多施設前向き観察研究

研究の概要

アナフィラキシーは全身のアレルギー反応で、時として死亡に至ることもあります。ほとんどのアナフィラキシーの経過は、症状が一時的に出現した後に消失しますが、ときには症状が再燃して再び治療が必要になることがあります。この二相性反応の発症頻度は1%から23%と報告されており、患者さんが病院で治療を受けて帰宅した後に起こることもあるため注意が必要です。しかしこれらの反応に関する本邦での調査は少ないことから、この研究の結果を通して、今後、患者さんにより良い医療を提供できるように役立てたいと考えています。

研究の目的と方法

目的: アナフィラキシーと診断された患者さんの頻度と特徴および経過を明らかにすることです。

方法: アナフィラキシーと診断された患者さんを対象に、通常の診療で得られる、患者さんの症状(発疹、呼吸困難、立ちくらみ、失神、腹痛、嘔吐)、治療および経過の情報を収集します。また帰宅して1週間経過した頃に、症状に関して電話で調査をさせて頂くことがあります。

本研究の参加について

当院救急外来を受診され、アナフィラキシーと診断されたすべての患者さんを対象としますが、この研究への参加は自由です。参加されなくても通常と全く変わらない診療を受けることができます。また一旦参加された場合でも、いつでもやめることができます。参加を拒否される場合には下記問い合わせ先までご連絡ください。

調査する内容

通常の診療で得られる、患者さんの症状(発疹、呼吸困難、立ちくらみ、失神、腹痛、嘔吐)、治療及び経過の情報を収集します。また帰宅して1週間経過した頃に、症状に関して電話で調査をさせて頂くことがあります。

調査期間

研究対象期間: 2020年5月～2023年5月

研究実施期間: 倫理委員会承認後～2023年6月

研究代表者

国立病院機構静岡医療センター 大屋聖郎

当院における研究責任者

国立病院機構熊本医療センター 救命救急科 原田正公

問い合わせ先

国立病院機構熊本医療センター 救命救急科 原田正公

TEL 096-353-6501